

ICT を活用したソーシャルスキルトレーニングの実践

山西潤一（富山大学）・水内豊和（富山大学）・木村裕文（株式会社グレートインターナショナル）

概要：2017年3月、特別支援学校・教室向けに「ソーシャルスキルトレーニングのためのICT活用ガイド」というCD-ROMつき書籍を出版した。学校生活における様々な場면을題材に、その時どのように振る舞えばよいのか、児童生徒同士が話し合いながら解決策を見つけていく構成になっている教材だ。学校・社会生活の場面では、様々な場面に直面する。問題の解決には本人も含めて他人への配慮、思いやり、バランス感覚が重要になる。筆者たちが、この本を書き上げるにあたり、取材したいくつかの学校、個人の事例をもとに、ソーシャルスキルトレーニングの新しい方法論の提示と課題、すぐにでもスタートできるいくつかのヒントを提示してみたい。

キーワード：ソーシャルスキル、ソーシャルスキルトレーニング、特別支援、生活指導、ICT活用

1 はじめに

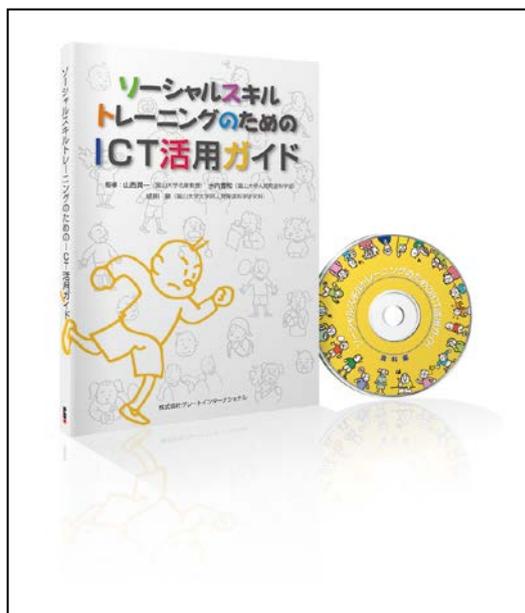
「ソーシャルスキルトレーニングのためのICT活用ガイド」というCD-ROMつき書籍は、平成24年（2012年）から3年間行った、総務省のフューチャースクール事業と文部科学省の学びのイノベーション事業の中から生まれた。富山県立ふるさと支援学校で行った実践をベースに開発したソフトを改良し、実用に耐えるように工夫を凝らした。NHKが放送とWEBで公開している「NHK for School」の中の特別支援教育用の番組「スマイル！」という15分ほどの番組コンテンツ20本を活用する形で、番組を見ながらソフトを活用することも、また、ソフトを活用した後に番組を見ることもできるという形式だ。

このソフトをいくつかの学校に実践していただいた。北海道、福島、富山、熊本、鹿児島など、各地で様々な活用方法で使用していただいた。これをもとに本を作ったが、その後、この本、ソフトを活用していただいた実践事例を紹介し、特別支援学校、あるいは特別新学級におけるソーシャルスキルトレーニングの授業の幅が少しでも広がり、教員の皆さんのお役に立てればと考えている。

2 研究の方法

（1）調査対象および調査時期

調査期間は、活用ガイドの書籍を執筆し始めた平成28年（2016年）12月から平成29年（2017年）、つまり本年の8月までとし、実証場所は北海道と福島県の特別支援学級を有する中学校それぞれ1校ずつ、富山県における家庭での実践、熊本県における小学校の特別支援学級における実践に加え、市内のすべての特別支援学級での活用を始めた鹿児島市の事例など、実際に現地を訪問し、担当教員の話聞き取り、あるいは授業の様子を見学させていただき、その後、担当教員からの感想や、意識したこと、あるいはソフトに関する改善点の要望などを伺う形で研究を進めた。



(2) 研究の目的

日常生活の社会性の確保や自己をコントロールできる技能など（ソーシャルスキル）を修得するソーシャルスキルトレーニング（SST）を補助できるICT教材の開発を目指した私たちの試みが、現場でどのように受け入れられ、活用されるのかを見ること、あるいは知ることを第1の目的とした。

第2の目的として、よりよいソフトの開発・改良、あるいは年齢や社会の場面を加えた第2弾、あるいはシリーズ化、さらに、活用ガイドの続編の制作の研究資料とすることを目指した。

(3) 研究の手法

授業で実際活用している現地を訪問し、ソフトを活用した授業を見学し、その後、担当教員と視察者を交えてヒアリングを行った場合と、授業見学はしなかったが、授業の様子を写真で紹介していただき、担当教員からヒアリングを行った場合の、大きく2つの方法で行った。

いずれの場合も富山大学からSkypeで筆者の1人である山西はテレビ会議に参加し、担当教員から直接、感想や改善要望などを聞き取る形で行った。

また、ソフトに収録してある全問題とアドバイス例をA3でプリントアウトし、そこから担当教員は授業前に問題を選択し、子どもたちに提示し、授業を薄める形をとった。どのような問題がソフトに収録されているか、あらかじめ全容をつかめるので、提示したい、あるいは考えさせたいテーマ、あるいは時期、季節にあったテーマを子どもたちに投げかけ、普段の学校生活に役立てるようにした。

3 結果（実践事例から見える活用の可能性）

熊本市の小学校では、9人の児童と3人の教員で実践。

全問題を掲載したページで、本時の問題を担当教員3名で話し合っ

て決めた。「仲良くなろう」（仲間関係）の中の「共通点を知る」の問題の中から「教室で本を読もうと思ったら、〇〇さんの読みたかった本を花子ちゃんが持っていたよ。こんなときどうしたらいいかな？」という問題を選択。同じ本の取り合いになる場合の対処をテーマにした。これは日常でも時々起こる場面で、解決方法やお互いの気持ちを児童たちと話し合い、考えていくことにした。



図-1

32インチのモニターにPCを接続して本時の問題を児童に提示。

先生が問題を読み上げた後、全員でその場面を共有するために2人の先生が、問題と同じ場面を再現（寸劇）。「さて、こんな場合、みんなはどうするな？」と児童たちに問いかける。そして、選択肢を1つずつ読み上げていき、自分だったら、どのような行動をするか、自分の顔写真付きの大きなマグネットをモニターの横に置いた可動式ホワイトボード上の「1」「2」「3」「4」と書いた番号の下に貼っていく。



写真-1

今回は「1」 その本おもしろいよね。花子

さんも好きなの？と話しかける」が2人「「3」その本、自分も好きなんだ。いっしょに読もう！」と話しかける」が7人であった。そこで、先生は、みんなが選ばなかった選択肢をあえて選び、その評価とアドバイスを読み上げた。本の取り合いになることは、普段の児童たちにも時折見かける光景で、このよう場面を児童たちにも問題点として、「これはあまりいい行動ではないかもしれないね。」と話し合いながら、自分たちの選んだ選択肢を開き、さらにそのアドバイスなどを見ながら話し合いを進めていった。

ソフトウェアを使い始めてまだ日が浅いということだったが、3人の先生が協力して、上手に指導していた。9人の児童を飽きさせることなく、先生が問題と同じ場面を再現しながら、児童に行動の選択を促し、その行動の是非を話し合いながら進めていったことは一斉学習の参考になり、特別支援のクラスだけでなく通常学級でも参考になる進め方の一つとなると考えられる。

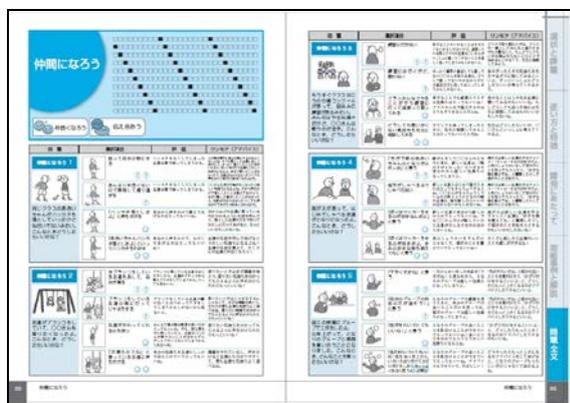


図-2

次に中学校の事例を紹介する。

生徒5名に対し特別支援学級の担任と副担任で授業を行っている。普段から複数の教員が関わっているため、教育相談では話しやすい先生に悩みを相談することができている。生徒同士の関係は、男女の仲が良く、同学年内でもフォローし合う姿が見られる。女子生徒内では、上級生が下級生の面倒を見てあげる姿がよく見られる。

(1) 事前準備として、生徒に気付かせたり考えさせたりしたい内容について選定する。

(2) 本時のテーマを伝え、普段の学校生活や家庭生活からテーマに沿った問題行動や悩みを振り返らせ、ワークシート(右の図)「1 自分自身の問題点について考えよう！」に記述させる。

(3) ソフトウェアを用いて、シーン毎の課題に対し、自分ならどうするか考えワークシート「2 いろんな場面から考えよう！」に記述させる。選んだ選択肢の星の数と記述した行動について、生徒のフォローをしながら解説をする。

__月 __日() 名前 _____

テーマ [_____]

1 自分自身の問題点について考えよう！

いつ	どんなところ

2 いろんな場面から考えよう！

シーン1	
シーン2	
シーン3	
シーン4	
シーン5	

3 1の問題点についての改善点「〇〇しよう！」

4 授業を受けての感想

図-3

担当教員は、生徒に「考えさせたい生徒の行動(課題)がソフトウェアの選択肢に入っているか」と「ワークシートの1に記述させた内容との一致」に苦労したようだ。前者に関しては、付録の全問題一覧を印刷して手元に資料として持っていたため、ソフトウェアをいちいち開かなくても内容を確認できたことで事前準備の時間を短縮することができた。後者に関しては、普段の学校生活において、生徒に考えさせたい内容をいかに気づかせるか、ということが課題となったようだ。

NHK for school の「スマイル」については、

小学校の授業でも視聴した経験があるようだった。したがって、小学校との指導の連携が課題になってくるのだが、今回の3つの内容はなかなか解決されない難しい課題だったので、再度番組を視聴することで小学校での学びの復習にもなったようだった

また、一部の生徒からは「幼稚くさい」とバカにするような発言があったが、実際に視聴してみると予想以上に生徒は面白がり、行動の改善を考えるのに役立ったようである。

このほかにも生徒と担当教員が1対1で向き合った実践や、家庭学習において活用した実践も行った。

4 考察

本ソフトウェアは特別支援の児童生徒たちの社会生活への参加の支援を目的にしている。実践研究を経て実用化はまだ始まったばかりである。さらに多くの実践事例が必要だと考えられ、もっと多様な活用方法も期待している。また、ソフトウェアも、いまだ改良を加えている。

そのポイントとしては主に以下の5点である。

- ① 現在の Windows 対応から iOS も含むマルチ OS 対応にする。
- ② クラウドプラットフォーム(クラウド環境)での配信での活用も可能にする。
- ③ 個人履歴の保存場所と考え方の検討。
- ④ 使用している各場面でのイラストのプリントアウト。
- ⑤ 画面・文字サイズのピンチアウトによる自在な変更。

上記のことを実現しつつ個別学習と一斉授業の両方の活用を、これまで通り実現させていくことが重要だと考えられる。

また、何よりも数値では出てこない、児童生徒自身のソーシャルスキルの獲得の効果がもっとも重要だと考えられる。

このような点を今後も注目していきたい。

5 結論

我々はタブレット PC や電子黒板等を活用とともに放送番組(インターネットの番組)をできるソーシャルスキルトレーニングの一手段を提供できたと考えている。活用ガイドという書籍とともに使いやすくなったことも事実である。

しかし、本当の成果は、今後活用していただく教職員の方々の手に委ねられていると言ってもよい。是非多くのご意見、感想をいただきたい。現在、富山県教育工学研究会のホームページから試用版がダウンロードできるので大に活用していただきたい。

6 今後の課題

考察で記したように現在進行中のクラウド環境やマルチプラットフォームに対応することと、柔軟な履歴管理の活用の方法の獲得、文字表記、自在なサイズ変更などが今後の課題として残されている。

参考文献

特別支援教育 ソーシャルスキル実践集 ー支援の具体策 93ー岡田智・三浦勝夫・渡辺圭太郎・伊藤久美・上山雅久／編著 明治図書